

ガラスの犬

【犬語の研究】

堀田 展造

七月堂

ガラスの犬【犬語の研究】  
目次

余白	7
第一章	11
第二章	21
第三章	31
第四章	43
第五章	53
第六章	63
透明人間の視る異界	近藤耕人
あとがき 犬の夢	堀田展造
	79 73



ガラスの犬【犬語の研究】

堀田  
展造

彼は墓に臥す

星々の灰の上に、一族の共有の灰の上に哀れな人物は横たわっていた、海には欠けている無の一滴を飲んだ後。(空の硝子壺、狂気、城に残っている一切?) **無**も去り、純潔の城が残る。

(ステファヌ・マラルメ『イジチュール エルベノンの狂気』——秋山澄夫訳 最後の章句)

（蛇が這う不眠の月光下 盲目の草叢

月面は顔を失う

凝固する夜の黒い宙

星々にばらまかれる神経鏡片ガラス

緑苔の鱗くねらせ ガラスの空花瓶は転がったままに）

（私）は**覚醒**し語の石に語らせ語の空いた鎖環を乗々と滑っている **と思う**

だから午後には再び知らずに問うだろう 無邪気な昼の新月の

薄目をあけた自慰のように

（犬が鏡に写るだろうか）と

千切れながら 次の日の昼下がりの上空へ また次の日へ

顔のない新月 白い神経をぶら下げ

不毛の雲を吸った夜の花瓶

何層にも陥没し 暗い唇の竅穴へ

（夜は**垂直の虚ろ** 押し込めても脳の中で気化する肉声

ガラスを刺す虚像は一瞬の激発だと知るとしても)

水没する水の無音  
鏡の中の不眠の夜

覚醒をめざす覚醒の鏡片

欠片 神経の棘 黒い宙に放ち

星のない海を見下ろすために

唇が**水平に広がって**いくそこでしかない陶酔ガラスの水面ではないか

——そうそう 人類の脳天深く (夜の虚ろを埋めようと因斑の松明が染める祝祭の前夜で  
あればこそ)

金緑の蛇が這う 煌く陶酔の波紋に乗り

空花瓶は転がったままに

水温の一匹の犬 鏡の中にじつと蹲り

白夜の極上の青いシートが

生き物らしい血走った銅目あかめを包んでいた

花瓶に沈むまなざしの花々

見詰める者もない鏡面ガラスの犬



第一章

総毛立つ 夜の不毛の雲を食んでいた  
崩落する水花瓶

一本の水茎の 蒼い頸骨を折り

そこは すつぽりと無響の水穴 水没する無人の広場  
痛くもなくしやりしやりと鈴の音振り乱れ  
(どこまでも広がる一様な鈴音だった)

幽かに

たまねぎが一枚 脳から剥れていく  
白い雨足が切れ切れの瞬間をゆつくりと凝視する  
おお 石<sup>誦</sup>は息だ

(あらゆる石が恍惚のつるりとした石だ)

胸を透過する等質の水

一切の時間とともに失墜する水<sup>スキヤンダル</sup>

路面下の水海を漂う首<sup>ブイ</sup>

揺れる水中花　水影　あなた？

（覚醒を怒号するらしい至近の雷鳴が　雨中にはためく山上の  
祝祭の幟を撃ち続けていた　性懲りもなく）

〈私〉は肉体ガラスの犬のない死者 のように

夜の寡黙の背骨に滑り込む

もつと壮麗に空洞のシロフォンを奏でようと――

駆け下りる櫛状音階 透過する滑らかすぎる砂嵐

開け放たれた夜の扉から飛び立ち

森を跨ぐ鳥影 眠りへと気化する長い尾の影語たち

執拗な羽音

半音ずれた眠り

〈私〉は寝静まる街角のあらゆる厚みと影からさえ押し出され

脳から剥がれ落ちるたまねぎの影 無明の白樺林の語尾

の よう に

遠い 重い冬空から落ちた蝶

まだ生温い昼の羽を掻き毟り

痙攣し落下し ことば 羽音

沈殿する不眠の落砂 重力を失った地底細音  
頭骨の壁に凍ったステンレス針で線描画を描く

遠ざかる唇の翼 鳥影という風景語  
ノスタルジー

触れない語環の空洞に

ばら撒かれる無色の石の砂漠に **のように**

掠れた語の線描画を辿り 明るい不眠の広場にいる きつと  
それとも味もない眠りの銀鎖を噛んでいるのだろうか 凍った歯で

脱走する千頭の犬群

押し寄せる海のざわめき 流れ去る波音の際

平らかな**夜の**水

**骨格のすべて**を満たし濾過し 塵もなく

軽々と落下し 分散し いずこへ

こめかみの鉄輪が水花瓶をきつく縛っていた  
白い海月の脳器

死んだ笑いの髪を広げ

もはや形もない胴と手足である**水の中の水の中**

美しいアミバーに触られる脳

鏡には写らないもうひとつの〈私〉

ぴくつくだけの有生細胞群の誕生を間近に眺めていた 溶けた魚の目で

背後には凍りつく鉄輪の空窓<sup>（しほ）</sup>

——粉雪まじりの暗い路傍で〈私〉は生まれた

（と告げる遠い額縁越しに）

〈私〉は太古から生きてきた濡れ慣れた**死者**のように

水底の回転扉を押す

意思のない流木の爪を立て

喜々として水の外へと突き出し屈伸し

ぬめりと 舌のない無響の喉声を吐き （回生せよと）

脳を食うアミーバー　アミーバーを食う脳

目が覚め異言にカサつく蜘蛛の首骨ごと　そっくり手に取る

(行為の瞬間は冷たく巨大だ)

〈私〉はこんどこそ乱舞する粉雪の死細胞に近づく

そいつこそ極上のアミーバーだ

正気らしい　健気に綾なす氷刻の帷フクロニッケル

凍土の過去へと裂開し

だがそこにも死んだ笑いの襷を展げ

拳に似た細胞突起群は生きている脳内触景であろうか

青白い象皮の憎悪と憤懣の

発光する海月の百の指先に

舞い落ちる雪虫ども　新生の灰骸群よ

ア  
回と消滅の白い瞬間の長い列 頭頂を穿つ水流の襲に沈み  
暗い哄笑の洞穴の奥へ

〈私〉は何度も死んで流れていく

〈私〉はいない と言う

軸のずれた螺旋回転

梯子状神経突起の摩擦

速度の**限界**と眩しさのあまり犬の眼が開く

(何も見えない

見えている)



〈痙攣し 安寧な着地をしらず

後部脳漿に生える金属上唇 翻り薄青く光り〉

私が犬語を話していることをあなたは信じるだろうか  
と呟く

〈肯定も否定もない犬語 異境を旅する回転梯子の道化師  
のように〉

第二章

濡れない水の夜を滑り

平原へと解体される〈私〉

見たこともない白磁の外洋へと一気に泳ぎ渡り

振り返ると青白い河口の牙が澄んだ夜空の冠を噛んでいた

（浜辺では群がり止まない鳥葬の儀式

象皮が散乱する饒舌の交差点）

黄色い太陽がもたらす白昼であれ

外洋の宙光にはばたく葉緑ゼリーの羽

夕景へ飛び去る羽

暗い森に消えた足跡

残された白木蓮の匂い

首筋に微かに纏わり

忘却の瞬間に間近に立ち会うだろうか

熱帯を吸込む腸の口に活けた花弁が微笑む

——（私）は忘却を知るわけではない

〈私〉は光るアミーバーになり流れていく

森に住む濡れた群集を掻き分け

押し寄せ移動する太古の群獣の

列をなす紋章の背の光を見下ろしていた

草原は影も温度もなく

明滅する意思のない光列神経

やがて地上の予感に似た幽冥の川筋に沿い

幾億の昼を跨ぐ不落の白夜ドームを形作るであろう

人類の創生と忘却を溜めたいつもの薄青の川幅いつばいに

月光が零す忘却の漣

散逸する平原のモザイク模様

昼にはない青白い河口を透過し星々の神経光列が蘇る

ざざめく金属の川音の 沈黙の底

変わらぬ黒い静寂の宙

花の匂いもない時の外洋を流れていく

岸辺はいつからか凡庸な忘却の闇の中に遠ざかり ほんのりと  
嘗て〈私〉と言い慣わした古い語の丸アのブ石リ

岸辺を埋め尽くし 臭い巢穴に眠る蟹の街よ

「ミイラよ、この紡錘つむみのように細い手よ

汝の臍物をひっくり返すための

この両手に、おぞましい影が

一羽の鳥の姿をとる」\*——

夕景は獣の息

差し込む熟果の甘い風

ふいに名指される空虚ミイラの仮面の下に

(あるはずの顔か?) 滑らかな朗読 摩擦する問い

葉裏にはちつばけな吉兆のかげり 筋雲の微小な先に

午後の光を溜めた書割の空の 退屈の受け皿に

罅割れた電線網 受電する葉脈神経ひびの慄き

\* アントナン・アルトール『ミイラ書簡』より 小浜俊郎訳

総毛立ち 鳥の柔毛の高音と

絡みつく低い犬声に似た風圧

花粉塗れのアルファベットの嘴 のように

痙攣し哄笑する波雲 〈私〉は狂った無言劇の動詞を飲み込む

日々変わらぬ錆びた落日よ 大気の長々しい火櫛トトロジよ かくして

〈私〉は決意とともに愛着と類推の台本を捨て楽々と離陸するのだが  
模倣のひくつきを止めない饒舌の秒針

時計仕掛けのマネキン群が踊る模型の電光交差点

重い空は紡錘つむじの爪先で抉られるだろうか

〈朗読がばらけていく無言の仮面舞台〉

おお この両手こそが舞台で苦悩のカプセルを愛でている

道化の苦悶と陽気な恐怖が煮え立つ明るいカプセル舞台よ

紙切れと玩具だらけの一昨夜の夜話を掻きまわし

清潔な空虚の砂嵐よ

軽やかな身投げの羽ばたき

嬉々として銀箔の風を切り裂き

吹き消した蠟燭の濁った影絵を嘲笑するだろう

断崖上空は真空の憎悪

〈苦悩〉の内臓を引きちぎった両手をも噛み砕け と喚く

（顔はない 断じて 岸辺に砕け散る新生の泡波のすべてを数えるほどに冷静だ）

犬になれ 犬になれ犬になれ犬になれ

覗く者はない仮面の下 澄んだ眼の空洞と赤い喉の高炉

犬語に震える犬・犬・語

解き放たれる獯猛へ

喉詰りの犬声

噛み合わない狂白の顎骨

同化も異化も拒む骨格の隠れ家へ

親しんだ水中の疾駆へ

蒼穹に通じる背骨の空房に

新生の氷の鈴音 シロフオン 振り乱れ

次に色模様の屋根屋根の澄んだ上空をさえ俯瞰する



白色のきつと**半覚醒**の空の高みへ

何もかも跨ぎ越し

舌の重力管を失ったゲル状の（私）？

なのに何度も何度も真つ直ぐに澄んだ目の犬が落下する 気持ちよく

（ほおっておけ！ 黎明だと？）

（信号カテゴリーにすぎない日々の幕開けも！）

（昼の根瘤が膝まづく<sup>ア・ブリ・オリ</sup>

いつかそこにいた白霧の奥

還流軌道に乗り洋上の空との幸運な溶解を果たした鳥が<sup>ベルンナ</sup>

不帰の生死もない夜のすべての夢を凡庸に見下ろしていた)

星のない外洋の光輝

すでに失った顔 **と言っ**

身震いしさらに平らになり

夢の光が海星どもの海中平原を満たしていた

平面放射する神経鏡片

頭部を欠いた不動の犬の銅目めがねふたつ

不眠トキムロシの夢をもつと食め

(生まれたての目玉と上唇だけの犬が歩き始めるぞ)

第三章

行き交う喪章の額と額

道化ズボンが膨らむマネキンの交差点

引掻き歪んだビル壁

斜光が巨大な雲の赤い腹を刺す

顔のない額

不揃いの鳩胸

緑塀に沿う雑踏の溝色に

立ち竦む無色の空地に

透けたたまねぎが放つピチカート 沈黙ひとつ

〈遠地に譲渡されるひとひらの花卉にさえ

—— 黒い向日葵を生む裂け口はある〉

澄んだ魚が吐く朽葉の遺言よ

花を朽す種子 憎悪の

生温い血流の 最後の葉脈が書く

紙魚だらけの 判決のその語さえ

(美しく血塗られた枝ぶりの腕を掲げ 街は

古代の洛陽が色褪せていく)

はじめから朽葉の光景だ

鉛色の地図 退屈な窓列 上へという語

分岐破裂し空へと垂直に整列し

夕景を完成する幾何学の血痕網膜

泥鳩が一斉に首吊りする電線を犬が見上げていた

赤雲と夕風に溶けた魚体

重ね染の遺言に濁った腹

地上は連弾につぐ連弾

整然と絶頂に達する華麗な連弾の響き

(聴き飽きても引き返すには間に合わない)

(卜書きの光景)

巻き戻し不可の楽譜どおりに 静止する)

葬場の地下階段に置き忘れた

片足が喚く偽休符の呪文だろうか？

**首吊りと洗顔を同時に行う** こんどこそ軽やかに

あらゆる振る舞いは朝の平らな一枚の光景にすぎないではないか フィルム

背走する人列

フィルム 落影の消失点

アンフラマンス 翼ばかりの影の跡の ——

石塀の落書きにまじり

近づくと一拍遅れて結晶し直し

(影はもうない)

愚かしくも犬を犬と呼ぶだけのことではないか

欠落を凝視め合う？

だが双眸の綿毛だけが交じり合い

乾いた昼の谷底から眺める虚しい夜空に

抜け殻を満たす恍惚の石

びくつく網状血管の犬脳を晒し

頭蓋を轟々と洗う銀色の川の

**明晰**の水流に乗って突き破り

一切の解答の解答を覆し

腑分けの恐怖さえ知らず

**犬の目玉唇を美味そうに切り裂いたのだった**

人人の迷宮の掟どおりに

**犬を撃てと**

薄膜の天空

突き刺さる樹木の根

路上には梢葉に千切られた臉

練り歩く喧騒の蛇腹

神経胞子房の炸裂はやまない



連々と続く真昼の白い多重露光

幾ばくかの湿りを保ち 地上からずれていく光輝と眩暈

オーケストラを従えた火鳥の計画を持ってと

未到の 震撼し氾濫する上空の白日を待ち受けていた

気孔に融合する黒い宙

顔の揮発へ

羽化寸前のエメラルドの葉脈房

たまねぎ

開かれた逃走へのいくつもの四辻の真中で

怒張する軒先に真夏の涎を垂らし

白昼の最高輝点へ きりもみ**旋回を停止し** ひたすらに上昇し

恐ろしくもなくガード下の暗がりを放火する

屹立する二又街路が色彩の炎に包まれていた

私達の顔も青い炎だ 見られることはない

地上からずれた黒点の不安

太い血管に生い茂る早生の枝枝の棘

綾なす不実の花々 不調和の思考に悶え

迷い込んだ拒絶の路地裏で

燃え盛る陽炎が吠える犬を焼いていた

あらゆる再生への異議 真つ白に 声かぎりに

無人の四辻に投げかける武装の掌影

黒々とかざし 清浄の掌に包む熱い灰の目蓋にも

億光年露光の 白光の山顛よ 地図にない高地の無限回廊へ

冷たい地下水脈を穿つ草原へ

接続した葉脈管を登りつめ 水が流れる黒い宙 そこに

裏返しの緑影 小さく揺れ

指から漏れ 静寂の暗い炎

逃げ去る薄い耳たぶ

(死んだ犬への穏やかな風の囁きではなかったか)

二 黒い光

(近すぎる好運の暗い机下 広大な静寂のそこに  
空無の破壊と獍猛を祝う酒宴の幕裏に

密集する影のない無響の光線ばかり

白光の山顛を飛ぶ 無言の鳥が見る犬の風景だ) と言う と言う

風景を載断する白い雨脚  
一瞬の黒い光  
影は影

第四章

動かぬ足

影を踏む首のない影

夢へと集まる青い影の影

地上の押し花どもは時塔の燭台の上で腐りかけているだろう

儀式の夜を司る絶対の星座のもとで

巨大な眠りの碾き臼が軋む

重さのあまり昏睡する石

横たわる花茎の関節を回し

深深と眼球の白い根も生え

けっして掴み得ない過ぎた雨煙をよぎり

水中花の半透過膜 遠くから芳醇に梳き流れ

見詰める赤い血の毛根の先つばに

夢見心地に嘔み締める犬歯の隙間に

犬が銜える冷たい花卉の肢体

生き返るガラス花卉の舌びらが淀みなく語るだろう

(そいつが影を操り)

広々と浮き出る青い敷石の広場

白い雨足 一瞬に横断する黒い光のように

(水没した ベルツナ 鳥の墓 風景の深海を夢見る たまねぎ 眼玉が泳ぐ)

(溶けた秒針の蜥蜴が蔓をよじ登っているぞ)

触れない光景

(色空を埋め 水中花が奏でる瀟洒な連弾の響き)

鉄輪の窓枠に巨大な花雲が膨らむ

時計台からの交代の合図もなく 井戸穴から生え上る暗い蔓の眼も)

目覚めても蔓の眼を引き摺り靴を乗せ敷石がずれる

習慣であろう夜毎の碾き臼から歯が飛ぶ 行ったり来たり

踏み外し ねじれた振り子の 狂った夢想だ

地下階段に置き忘れた片足の 不在の疼き？

遠近二層のずれたりリズムを刻み

犬が螺旋のステップで踊る

きつと一昨夜の雨上がり 動かぬ足で

影の影 銀色の水溜り

鮮やかな青い敷石



(いつか 辿り着いたはずだ)  
雨に濡れる長い敷石伝い 街外れの湖底に  
空虚な煌めく飾り窓 そこに

青白い月面の急旋回

背を丸め眠り耽る馴染のミイラを見つめていた  
冷たい乳房を垂らし花卉の肢体が燃える  
色鮮やかなあらゆる臓腑を晒し

湖面には層をなす燃え尽きた灰の霧

泡立つ網状閃光

灰青色の湖底と覚醒の眼床が繋がる一瞬だった

(不在者を愛する一度きりの 終幕の舞台に相応しい！  
気丈にも逆さ読みしている劇場の台本どおりだ)

ゆらめく海藻のいくつもの掌が

滑らかな昏睡の背を撫で回していた

流れ行く水葬の緑モズク

艶やかな黒髪の投網 大きく振り上げ

もう一度 ひしと抱き締める もう一度？

(眠りのシーツを裂き 発せられてもいい悲鳴は聞こえない)

不眠の鍵穴が覗く

青い敷石に続く臉の青い庭

〈死を暴く目覚めは永遠にやっこない　ここは犬が青白い光に誘われ迷い込んだ劇場だ  
演者になつてゐるとは知らない夢見心地の観客よ

そうそう　恐ろしい疑惑も美しい疑惑も暴かれることはない

断崖に立つ　冷酷な死のドラマ　佳境の舞台であればこそ

交差点を遮断し

星明かりの千年の通夜

弔問の客は初めからいない

不明の鳥の翼

取り壊したビルの窓枠を過ぎり

塀のない夜気の庭

星々と亡霊の寝息が満ちていた

見えるはずもない網膜の奥深く

昏睡の舞台を囲う黒幕に隠れ

ぼうと光る臉の帽子を目深に被り

寄り添う死骸が吐き出す闇の水を啜ろうと

もうひとつの透けて覚めている脳髓

水色の腹の蜘蛛 静かに横たわり

細く透けていく生骨

生きて死んでいく 闇に穿たれる光る穴 そこに

光る死骸と 死骸の光像<sup>シイッ</sup>

闇に穿たれる光る穴

眠りの無響の穴に

たまねぎの光る皮

また一枚脳に重なり　すぐに剥れ落ち

頭皮の下は砂の瀑布

無量の**分身**の輪切り　ふつと消え

ぶつくりと目玉唇が目玉唇を食べていた

牙を転がしびつたりと眼窩の奥に達し

海底では　流砂を嘔む貝音の突起が止まない

積み上げた**独白**の骨きまり文句　ちりぢりに

砂漠を詰めた壺の口を引寄せ

ぬるりと　変な味の水を　啜っていた

何も映さない夢床自身の砂丘を越え

血管虹膜の網目を眺めていた

近い？　遠い？

（狂笑寸前の頂針に堪えろ

叫鼻の爛れた襞壁に素早く書きつけよ

非の打ち所のない回文の 断固とした予告の文字と楽譜

さらに悲痛に叫ぶ覚醒へ

半覚醒の泥の悲しみを突き崩せ

死んだはず 犬の目の奥 蜘蛛の芥子実の光球強く光り

不滅の光に縁取られる劇場のドーム

開かれる華燭の円天井へ

さらに加速する夢の円盤の中心へ

第五章

円天井の窓が見下ろす不眠の夜  
凍りつく鉄輪<sup>フレム</sup>の空窓<sup>ソウマ</sup> そこから望む外洋に囲われ  
僅かに浮かぶ陰影の砂絵

〈粉雪まじりの暗い路傍で お前は生まれた  
かろうじて形らしい雪虫のように〉  
花芯の骸を挿したガラス花瓶はそのままに

一気に顔<sup>カ</sup>を割り<sup>オス</sup> 至近の岸辺に  
昼の黒子の裸体を焼く粒ぞろいの青い火粉  
乳房の火を含んだ灰  
容赦なく 悲しげに噴き上がり  
だがたちまちに未見の遠い白磁の外洋へ  
青空に接する垂直の夜の虚ろへ  
嗚咽する乾いた空気 天窓からどつと落ちていく



雪虫が落下し続ける遠い森の奥

月面は何度も顔を失うだろう

花芯の骸を挿したガラス花瓶は転がったままに

(絶対回文の台本通りだ)

至近の岸辺にはらまかれ

星々に涙する神経鏡片<sup>ガラス</sup>

白い腹と緑苔の鱗 くねらせ

這い回る一続きの白布の上<sup>シート</sup>

白布の下にまた白布<sup>シート</sup>

縫いつなぎ 食いちぎり

水浸しの割れた顔面<sup>カオス</sup>

枕辺を彷徨う上唇

死者とは滑らかな喉で泣き喚く鍵盤だ

(勤勉な海鼠が愛した水

苦い吹口と食べ残しの肉片)

(宙吊りの語) 夢のかけら<sup>セル</sup> 割れ続け

遠地に譲渡される泡波ひとつ

ア・ブリオリ  
星座を映す海

形見のひとひらの花卉にさえ

黒い向日葵 その種を生む裂け目はある

乾いた語を吐く石を海藻の舌が舐める

やがて灰色の霞 岬を曲がり 幅広の潮境を乳色に引き裂き

拡散し続ける遠い青空が 背骨の糸巻きをからからと操っていた

(どこまでも広がる一様な鈴音だった)

(重ねられた蒼いセル画 掌上に透けていく頭蓋)

「もはやそこに刻まれた線のうちに観念を定めることのないこの脳」。

たまねぎを刺す 白い雨脚

白日を襲分け

粉雪まじりの暗い路傍にも

液体アルミニウムの洪水

灰色に焼かれた血脈の道を掃き捨て

いつか ダイヤモンドを包む灰緑色の雨煙の日に

〈私〉は僅かに色を留める一本の水茎の あなたに出会うだろう

\* アントナン・アルトー『ミイラ書簡』より 小浜俊郎訳

〈もつと細い 折れた頸

紡錘<sup>つむ</sup>の点を呼吸する線描画の

はじめての語が繰返して編む葉脈思考の

〈私〉は割れた水花瓶の口を水中花のあなたに差し出すだろう

〈だが名に似た鈴音は聞こえる前に聞いたのだ どうしてセルに浮き出てすぐに遠ざかる花の名を呼びえようか〉

回流する水の唇 沈黙の口を舐め

涸れていく水花瓶

指呼する指のない問いの掌

空房の影 空しく揺れ

〈たれが遠い者でたれが近い者なのか？〉 鏡に問うように

わたしわたしわたし  
私はあなたは私はあなたは私はあなた

脱走する千頭の犬群

分散する千の顔

背中の海面にはびつしりと億兆波頭の同形封印

石の単語

(二面の波頭 鮫の目のほかに誰がいるというのか  
私達は いない と言う)

かけら 水花瓶 割れ続け 音の水 切れ切れに

おお まだ立ち去らない

(好運ベルンナの鳥の群が海面に光る影を撒き散らし早口で歌っていた

海自身の水没による巨大な死こそ

海面はきらきらとどこまでも氷漬けの花芯だ と)

死に損ないの海の頬を撃つ百の海流 空いっばいに

響き渡り のつぺりと老いた海原トートロジの弁明アリバイの声

海の狂った歓声

忌まわしい ことば

整った波形の凶器

(浜辺には気高い犬の遠吠えの地声

太古の潮騒ノイズが動かない**水平の安定**において応えているではないか)

寝返りしてもやはり一続きの白布の上だった

海鳴りの底はすつぽりと無響の水穴  
水没する無人の広場  
暗い雑踏の谷間には  
聳え立つ いつもの 白光の絶壁  
回帰しやまない霧雨の祝祭をこそ

深海の瑞々しいたまねぎだけが  
白々と 眺め  
未だ！ 未だ！ と叫ぶ

第六章



濡れない綿帽子の足音

澄明なトレモロ平行音

無痛の犬が歩む

—— からははれほら 降り注ぐ光霧の時が始まる

冠水し続ける空の空

千の針先ぶちぶちと一斉に囁き

記憶を千切られた向日葵の黒い首 首 首

絡み合い雨粒の太い針先にぶら下がり

分子増殖するいつもの黄色い太陽の

混交する暗い燐光を放ち 疾うに顔たまねぎのない頭蓋が膨らむ

〈私〉はたまねぎの白い重なるのまま歩く

〈光源を持たない一条の光線〉がさしこむ

と 住みついた蜘蛛が賢しげに宣まう

見よ！ と大げさに叫ぶ

白白とゼリーたまねぎの無数の果頭

ぱつくりと開いた王宮(内部)の多面球体

——稲妻の起源の問い？

だが軽々と透過し

刺立つ気泡の群れ (私) ？

水に籠る緩やかな二重狂声

金色の驟雨の中 再生し続ける幾重もの燐光

黒い宙に溶ける光る球体(内部)

犬は律儀にも鏡に写る蜘蛛の目を銜え 嫌悪のあまり

目に止まらぬ速さできりもみ回転し

果頭を切ったまなざしの先には

笑うべき微かな虚空

狂躁のたまねぎよ もつと膨らめ

頭が冷えていく

巢を吐く煩い蜘蛛

もつともらしい独白の水面の

疑惑の感触さえも一切を消去し

柔らかい皮膚や顔 そつくり失い

**亡霊の獣** いや狂って煮え立つ顎骨のままだ

あなたは水槽を泳ぐ盲目の白眼 ぶつかり分散する海綿体 ほら

私は 今また生まれ いつも水の中の水 奥行きもなく回転する環状気泡細胞群

あなたを包む根のない爪の透けた掌よ

吊るされた掌 白い斑雲

弱々しい稲妻を見下ろし 遥か上空に 白い幻

方角のない立体交差を彷徨うガラスの犬

濡れることはない

鏡の持ち主はとつくに蒸発してはいないか

河口には人人を吸い込む腐食金属の蓋

楽々と開かれ 鍵穴のない地下トンネル一杯に

せめてもの足跡の 菌糸が生える蛍光緑

健気な嘔吐の光る糸

巨大な鏡が作る都市 乱光の川

過食の眼球と房状複眼  
群集が犬を盗み見ているぞ  
コピ―し合うまなざし  
短命の雑踏の波頭にも  
乱反射する青空ひとつづつ

人人の川よ

這いつくばる地上！

冷たい水中に没し続ける 空

金属太陽の死骸が黒々と沈む

透明の黒い死体コルプスが薙く広場

星を失った哀れな海は見えない

路地裏を伝う笑うべきあちこちの弔いの合唱

人人の濡れた声の布の下に

清い敷石に密やかな光彩が満ち

虚妄を放つ海月

今偏差する雨滴の直線が一本

性懲りもなく 水きまり文句は不滅だ **と言う**

手当たり次第にそっくりの影の形を 着る

無味の薄闇の水 いっぱい吸い

食べきれない不毛の雲を抱え

(おお 生きているのか 死んでいるのか)

無為の狂気だ と言うことにさえ慣れすぎた **と言う**

生の断層は透明で空虚だ  
と言う夜を運ぶ上流の時塔も崩落し

高貴の城は消え

つねに空しい溺死の最中だ と嬉々として繰り返し言う

手のない鏡面の犬だ ともう一度言う

私はあなたは私

顔を失った月面 黒い宙に静止し

空洞の喉筒 等質の空

からからと過熱し

はじめから語を失った薔薇色の声帯を震わせ

何事もなく草原の川岸を行き交い

幼い金属の犬声

遥かな低い地声

銀色の大きな川 ゆつたりと

流れ 一昨日にも

森を出たまなざしは 滑らかな川面に放たれるのだが  
男の裏返る目に一振りのナイフ 突き刺さって いる

了





## 透明人間の視る異界

近藤耕人

ある日、堀田展造から『境界』という写真集が送られてきた。暗い水底に透かし見るような干割れした沼沢地、なにも知れぬゴミ、干涸びたたまねぎの残骸、皺寄ったビニールの乱れた風景だが、どれも目の前に迫り、作者の思念が臉の裏に焼き付いたような、内とも外ともつかぬイメージがあった。

ある日、私は堀田展造に「写真は良い」と手紙を書いた。それは私にはめずらしいことだった。

ある日、私は堀田展造に誘われて荒川の乾いた泥土を歩いた。灰黒色の土細粒は菌を食い縛って、白茶けた水草やドリンクのボトルやビニール袋やスニーカーの底をくわえ、黙っていたが、どれも堀田展造の写真よりも明るく、雑然として、打ち棄てられた残骸だった。私は身を屈め、目を近づけ、四角いフレームの中にゴミや枯れ草を配して眺め、瞬きした。いつの間にか私は眼鏡を通さず、生の目で見ていた。私の眼鏡は記憶の草叢かビニールシートの襞の間に消えていた。堀田展造と私は歩いた跡を辿り、記憶に戻り、枯草とプラスチックのボトルを目印に、偽の目玉を探した。

ある日、堀田展造は何百と撮り溜めたビニールのゴミが水辺や川縁に浮んだり張り付いたものの写真を私に見せた。ビニールの半透明のフィルムは変幻自在に形象化して、名前のある物や素材より妙だった。

ある日、堀田展造は何百という夜の東京の下町の、裏通りや表通りの、人が歩いたり寝たり、無人だった、風景にもならない不在の写真を私に見せた。行く当もなく、どこまでも夜の陰と雨粒に濡れ、犬を追っているのか、自分が犬で彷徨しているのか分からなかった。

ある日、堀田展造は犬の長い詩のような、硬質の言葉を連ね、プリントして送ってきた。

ある日、堀田展造はさらに長い犬と蛇と虫と獣の詩を送ってきた。紙の広い余白は肩に段差をつけて並べた黒い文字の行と同等に、白い意味で言葉の集合を囲み、砂地に落ちて埋まった鳥の黒い尾羽と同じ、不吉な光景にした。海からのたうち登る獣たちが、身を暖めるとも冷やすともなく蹲っているのを、雪の原が取り囲んでいた。

ロートレアモン伯爵ことイジドル・デユカスが書き残した『マルドロールの歌』の「一の歌」冒頭の言葉――

天に願わくば読者が、その読むところのもののように大胆になり一時的に獯猛になって、途方にくれることなく、これらの暗くそして毒に充ちたページの荒涼とした沼地を　よぎってゆく陰しく荒々しい道を見出すように。<sup>(1)</sup>

は、堀田展造の詩に冠しても有効な緒言になる。

堀田展造が犬となって徘徊する世界が異界と映るのは、半透明の膜<sup>フィルム</sup>が闇の影、雨、霧、雪また海水、そして天空をもまさに空<sup>くう</sup>となって覆い、それはまた身体なき「私」の内臓を包む膜であり、世界を見る角膜であり、口腔を裏張りする粘膜であり、脳から剥がれる思念のたまねぎの皮であり、口から吐き出される犬語を象る蜘蛛の糸となる。

夜半か夜明け前か、見えないカメラ内の人間が、日常の物語から逃げ出し、放浪者となって、亡霊のごとく街中を「すいすいと何食わぬ顔で歩く<sup>(2)</sup>」。社会の外に出たいと願いながら、一方では「幻想の共同体を渴望する」。「私」は「存在の影であり存在から剥がされる最先端の被膜<sup>(3)</sup>」である写真のようだ。写真はカメラとレンズを抱えて社会の中に踏み入ろうとしても、そのフィルムと印画紙、今やメモリーによって社会の表層をかすめ取るだけで、その中に入り込むことはできない、艶やかで清潔な皮膚と違って社会の外へ追い返される。それは社会の皮膜や体毛どころか、装飾にもなる美しい「影」の商品でもある。

堀田展造は亡霊という透明人間<sup>(4)</sup>（ガラスの犬）となって雨や霧や雪の街を、三脚も二脚もない目だけで歩きながら、亡霊のコミュニケーションの可能性を考え、「犬語<sup>(5)</sup>」なるものを思いついて快感を覚え

る。感情のない、自意識もない、ガラス窓（レンズ目）の感覚から吠える（語る）犬語（堀田展造の詩語Ⅱ死語）は人に聞こえず、理解されず、したがって自分は傷つかない。この中立地帯の風景は現実と夢（夢現）の境界、世界の光を遮って影に転化するフィルムであって、世界の光と影の表裏を含み、それは生と死の世界の往来自由の、両者が重なって両用に転化する半透明の鏡である。それは自然のスクリーンで、雨や雪や霧に触れて濡れると感度が上がり、外にも内にも浸透し、世界と脳が反映し合い、あるいは脳内に映った世界のイメージを見るという、夢見とも、幻灯の投影像とも見える世界を透かし見、その中を歩いている。境界も果てもなく、その向こうに死があるとも見えぬ光景はすでに生を越えた彼岸でもあり、世界の陰画なので、地獄ともいえず、地上の影と音響と照明が爬虫類や獣や虫となって動き、臚に光っている。そこには人間の言葉や感情がなく、深夜、あるいは夜明け前の透徹した空気がある。逃げていく先はなく、残してきた現実に未練もなく、所属のない、徘徊する姿なき犬は人間ではないが、言葉を吐き、並べて、意味のない意味を他者に嗅がせ、臭跡も残さず消えていく。人間の気配のない犬語の集積は、詩人という名の作者を抹消して、目の前方か裏側か、太陽の光や照明に浮ぶ日常の風景の表層下、世界の皮膚の下に隠れている真皮の実像を露にする。

生前でも死後でもない生の裏面、たとえそれが無か虚に見えようと、その暗い深淵の上に張った薄膜を見てわれわれは平素歩いているのである。暗い宇宙に浮ぶこの地球船も、明るく光っているように見えるが、太陽がなければじつは暗い水と土と石の塊だ。その上で発する言葉Ⅱ犬語は太古の遠吠えか。それとも世界の表層の凍土の下に眠っていて、夜明けの温もりとともに融け出した太古の森林のガスかも知れない。

これは人間不在の光景で、人間がいなければ風景もないはずだが、そこには身体なき無数の目が点在し、それはアミーバや虫や鳥や、石や樹や月の、自然に内在する目であるともいえる。人間は神に代って地上の主となったが、民族の争いは止むことなく、社会のシステム化と科学の知見による人間の数値化、部品化は進行し、主体的個人は今や身体なき器官名の集合となり、都市は思考なき反応、感情なき視覚の交錯する地平となりつつある。言葉は啓示でも理知でもなく、心の機微も分類と指示の用語で片付けるようになり、真の感性は小説はおろか手紙にすら書かれることは稀になってしまった。個人の日記は知る由もない。

堀田展造の言葉は情緒を捨て、有用を拒絶し、癒しを求めず、ゴミ捨て場とも廃品集積所とも思える都市の荒野で、密かに瞼を開く目をとらえ、自ら砂となり泥となつて、爪跡も残さず彷徨する。拷問にかけられた罪人がいるわけではないから地獄ではない。悦楽も歓喜もないから楽園ではない。だが不在の光景の静謐さ、情念を払拭された透明感は、神仏はいないが人間が跡形もなく消滅した無としての浄土といつてもよい。神の浄めも仏の慈悲もなく、孤独という古代以来の人間のノスタルジーもなく、ただ世界の陰面を眺める目が空くうにあるという、非人称Ⅱ犬の熟視が表象する都市の原初の視覚は、思いがけなく爽やかな空なる気である。そこから新生人間の言葉が呟きとなつて聞こえてくるとき、無意味の意味を纏つた言葉の中に無明の闇を開く目の光が点る。身体なき言語(犬語)が自らの目で世界を見、自らの喉を通つた声で語るとき、陰面の世界に原初の風と声が起きるのである。

堀田展造の世界はダリやキリコのシュルレアリスムの光景にも似ているが、潜在する欲望や孤独感が表現されているわけではない。ロマン派の月光や美の憧憬も、レアリスムの嫉妬と絶望もない。神話の懲罰も童話の救済もない。それは欲望の発生以前の個の発芽の夜明けであるが、マラルメの夜半の時間の象徴的停止と永遠の時間への跳躍、あるいは地下墓地への落下の思念があるわけでも、世代の物語があるわけでもない。ロートレアモンが物語を拒否し、ブランショが存在と不在の同居と同一化を探索するところで、分離と結合を反復する振子なき時計、分子運動の連鎖を視界Ⅱ異界に見つめる現在がある。それを無限というには、詩人は余りにも有限である。

かつての堀田展造の第一写真集『境界』の言葉は、この言語表象にもつながっている。

私が呼吸するこの空気が幾重もの階層をなし、階層がやがて重苦しい不透明な色彩を帯び、諧調のひとつひとつに、もの悲しい旋律の命が宿り、押し寄せる憂鬱の洪水に私は、すべてが呑み込まれていくのを、私の視覚のなかにとどめただけであった。華麗な鍵盤、優美な木管、ありとあらゆる星屑のような時代の言葉の乱舞に世界が沸き立つ時でさえ、辺境の空は、沈黙したままであった。私はひたすらに、ただひたすらに、壊残し、鬱屈した石をひとつひとつ、またひとつ、拾い上げ大切に私のポケットにしまいこみ、ただこの行為のみに夢中になり、身を屈め、時を忘れる。執拗に、王国を私のな

かに閉じ込めるように<sup>(6)</sup>。

一人の人間の時間を隔てた映像と言語のなんと類似、重なり合いか。この反復と持続こそが人間の同<sup>アイデンティティ</sup>一性であり、身体なき目と声が、同一の表象<sup>イメージ</sup>を脳に結んでいることの証拠である。そこに差異があるとしたら、それは偽造であり、装飾であり、商品化である。非人称の不在とは、人称を超えた真の、一人称以前の、無名の感覚と思考に還る無垢の場であり、目の言葉の胚胎である。

注

- (1) 『ロートレアモン伯爵 イジドル・デユカス全集』豊崎光一訳、白水社、一九八九年、七頁。
- (2) 「暗い部屋」復刊第一号、暗い部屋、二〇〇二年、五一頁。
- (3) 同、四九頁。
- (4) ジョルジュ・バタイユほモーリス・ブランショをH・G・ウェルズの妖怪になぞらえて《透明人間》と呼んだ。その「可視的空虚」にあるものは沈黙であるという。ジョルジュ・バタイユ『詩と聖性』山本功・古屋健三訳、二見書房、一九七一年、一〇六頁。
- (5) 「暗い部屋」復刊第一号、四九頁。
- (6) 堀田展造『境界』KUMO、一九九一年、一頁。

あとがき 犬の夢

じゃれあっているのではない、目玉を食う容赦のない殺し合いだった。白夜のもと異相の夢の舞台でそれは行われた。無数の白い頭蓋骨の捨て場である川岸。なんと眼窩を串刺しにされた同形の犬の白骨どもが風の笛になり一斉に喚く。w a w a w a という叫び。

私はあなたは私はあなたは私はあなたは私はあなた。つんのめつたような連鎖轉換人称(?)の変な発声にも聞こえるが文法をあてがい慌てて矯正を試みても無駄だ。犬は一匹ではない。無数の恐ろしい声が夢の海溝を彷徨う頭蓋の空洞に怪しくこだましていた。しかし奇声の音波が耳に響いたというのではない。圧倒的な無音の背景空間が頭蓋の奥深く沈んでいたはずだ。夢の無音に浸っていた。もともと無表情の犬どもだ。顔を失ったように白々と醒めてもいる。そいつらが同等に呼びかけあう等質の音がたえず打ち消しあって無音と沈黙の夢の背景へと溶暗していくかのように見えた。頭蓋の内壁に表れた「私」が「あなた」といわれる影を等倍で吸込み、そして吸込むことによつて何事もなく完成される夢だった。観察者にはその夢が無垢無用の気体のようなものに凝固していくと見える。夢として観察していたからだ。

沈静したはずの奇怪な声は再び沸き起こる。劇場のドラマのように相互の死を巡り喉と心臓を締め付ける迫真の無限循環が繰り広げられる。私を殺せ。あなたを殺せ。どちらともいえない殺害者の雄叫びが無音の刃になつて夢の中で煌めく。聞こえないもどかしさを破ろうとするかのように、昏睡と官能の奥底を押し上げその果てに獣どもの混濁した喚き声が無理矢理に一つの喉笛を通過する。夢の中で奇声を発した喉笛は夢を見た本人のものであることは間違いない。まるで犬になつたかのように。実際、自分が見る犬夢劇場の演者は夢を発する本人そのひとのほかにはない。

夢の中なのに実際のことでもあるような混濁した感覚だった。夢と実際との間を行き来し、自分がそこにいる白夜の青いスクリーンを見るように、半覚醒の感覚とともに陶酔の舞台を眺める覚めた観

客の目があった。眠っているはずなのに眠らない感覚が重なる奇妙な感覚。ありがちな変身妄想や自他合一の夢として現実譚にも還元解釈する芽はここにはない。ネルヴァルは「夢はもうひとつの生である」という。

夢はもうひとつの生である。見えない世界とわれわれとをへだてている、あの、象牙ないし角の扉を私は慄えずには押し開けることはできなかった。眠りのはじめのイメージは死のイメージである。混濁した麻痺が思考をとらえる。すると、もはや、いつから、「自我」が、もうひとつの形のもとにその存在の業を続けてゆくのか知ることではできなくなる。そこは茫茫たる地下だ。それがしだいに明るくなってきて、辺獄の宿を借りるものたちの、蒼ざめ、重々しくこわばった顔が、影と闇の中から浮きあがってくる。やがて画面が定着する。新たな光が、その奇妙な幻たちを照らしたし、演技させる。——「精霊たちの世界」が眼前に開ける。

ジェラール・ド・ネルヴァル『オーレリア…夢と生』篠田知和基訳

ネルヴァルのテクストは奇妙な明るさに満ちた森のような眠りと夢の物語へと彷徨っていく。しかし「物語」は眠りと死のイメージの中で演技する幻たちの足取だが、この眠りと死の夢を見る席ははつきりと目覚めた眠らない人のものだ。眠らない人は、「われわれ」を隔てた扉の向こう側、「見えない世界」に演技の果てに変容した自我を見るが、そうする限り演じられる死の物語とは無縁につねに死を奪われている人でもある。不眠の観者が眠りの演者に拉致され不死の人になる。夢が「もうひとつの生」になる。

蒼ざめた、重々しくこわばった顔、形の影たち、死のイメージ、それは「知覚しえない」ものの現出だ。知覚しえないものとは、通俗解釈では、対象にかかわるもの、たんに「見えないもの」のように見られるが、ドウルーズは、知覚・存在合一論を批判して、まったく正反対に対象すらない知覚、「死人」の知覚というような領野に知覚を位置付ける。「大海に浮ぶ浮」という。大海と一体化し浮沈揺動そのものである「浮」。「浮」は、「大海」のすべてを受け入れ一体化し、それゆえに確実に存在するが無に等しい存在だ。無であること以外に対象のない「浮」のような知覚の主について問うとすれば、それは、対象・一切の述語関係を絶ったある種の主体らしきもの、純粹亡霊、浮遊するモナドだというほかない。視覚が奪われてはじめてこのことが露呈するともいう、ベケットの亡霊的主人公は

「死人」でありつつ夢の中の人のようにあるいは観者ともいえない不眠の盲者のように生きている。

月はなく、星で穴のあいた空が、剥き出しの窪みの底の、薄い水の膜に映る。沈黙ははるか彼方の、沈黙に似てたえまない音楽にかわる。とだえることなく、一斉に吹く天上の風。すべてがせいぜい。砂利は遠くでかすかに光り、小屋の壁もはじめて白く光る。

眼を閉じても。眼にはもう霞しか見えないだろう。いや霞さえ見えない。眼そのものが霞でしかない。何と言えがいい。早く、それがすべてをぼかしてしまいう前に、何とか言わねば。光。裏切る言葉で。光る霞。もう果てしない。もう何も見えない。言うこともない。静寂。

サミュエル・ベケット『見ちがい 言いちがい』宇野邦一訳

色でいえば澄んだ青、透明に近い青。「言うこともない」なんと美しい経験であるか、と生きた感覚が感嘆するその経験とは死者との自己同一の場も含んだウロボロスのな輻輳テキストだ。この「死人」は、物語的な足跡はあってもありがちな道德の檻樓を着た人格死体、性や何らかの美学的様相を纏ったコルプスに還元されるイメージとは何の繋がりもない。「空」「薄い氷の膜」「天上の風」「かすかな光」「光る霞」など透明な気体のようなものが、残されたともいえない生の極限であるかのように、しかしつねにそれを「裏切る言葉で」、果てもなく引き延ばされて語られる。つねに逃れていく死の瞬間を見る不眠・不死の目覚めた目には、少なくとも実体のイメージはない。何も見えない、有限な実体を含まない空虚の連続があるだけだ。盲目で空虚を生き続ける不眠・不死の知覚が輝く。それは、視覚に関わる対象と関係、現実の有用的関係にはけっして還元されない、無用の「死人」の知覚だ。テキスト上の主体である演者に拉致された読者・観者はこの知覚を共有する。盲者のように、見えるべきものは何もないがはっきりと見ている、奇妙な空間・テキストは、夢の空間にも似ている。死の夢を諦念あるいは憧憬の言い換えとして、はじめから分離している演者のたんなるドラマイメージとして、観者が楽々と語ることは違う。眼を瞑れば詩のテキストの青い世界だ。

ネルヴァルが「辺獄の宿を借りるもの」といいドウルーズが「大海に浮ぶ浮」といい一切の対象をもたず存在の業さえ不確かでベケットが語るように眼は霞になりかかった「死人」の知覚だけが生きている存在。その知覚において物が名前とともに引っかかることはたぶんない。マラルメならば、家



具や壁掛けがなんらの意味もなく鏡に写る主人の瞳とともに溶け込む、「久しくも夢みられた純粹自我の麻酔させるような静けさ」の「夢の時間」「真夜」。いずれにしても、「生きた死人」の、もはや対象の形も時間も喪失した自我なき知覚は、たんに存在するだけの無用の犬の知覚においてもきつとそうだといえようか。訝しい犬の喉と犬声を所有したことから、これが犬の知覚だとして、眠りと死のイメージにおいて「死人」の知覚に突き当たったといえようか。夢の明るすぎる夜。不眠の夜、この夜には有用の温度はない。しいていえば無用の冷たさだけがある。

「もうひとつの生」の世界へ犬語の喉をそのまま差し出し語らせる。演者も観者も犬になりテクストは犬の喉から出る犬語でなければならない。

無用の存在者であることを指示し「犬になれ」という。しかし人であれ物であれ成立している充足的連関世界において無用のものの混入はあってはならない障害だ。犬はどこに居るのか。辺境、底辺の流浪者・表現者、「根無し草」「世捨て人」等々の分かりやすい欠損のよくある姿がそのようなのか。だが意図的な結果であろうと不如意な結果であろうと、欠損を落ちぶれた結果と等値とする身振りは、いうとおりの「辺境の無用の犬」のそれではない。はじめから欠損を放置しそのような欠損存在者として居座る者は、半端であるだけでなく、たんに欠損存在者という状態のありふれた中心的充足存在者である。また、有用に汚れた処世訓がなじむ「癒し」にも効く異端への変身や転向の擬態も、取替え可の商品のように有用の地盤にある同根の変種にすぎない。放置された欠損の空地にも有用の空地にも犬はいない。というより空地は元々ない。

「犬になれ」、無用の犬であれとは、いかなる関係からも果てしなく遠い。人はふつうに、無用の犬を激しく遠ざけ絶対的に無化し、すべての精力を有用の完璧な戦略と実行に注ぐ。欠損に対する無能・有能にかかわりなく充足のための戦略は戦略である限り、全体的戦略に値する徹底的に完璧なものでなければならぬからだ。というより不可知、難問にも見えようと現実の関係総体とは、かくあるように関係因子がつねにふつうに隙間なくパズルのように隣接因子に対して受動的に埋められている、それゆえ元々妥当であるはずの完璧な戦略と行動総体の、まったく同意的な言い換えにすぎない。そして同じ理由で戦略は、可能なすべての欠損の空地も有用の延長において予定建築計画のように幾何学的にいずれ必ず埋められると見通すだろう。だから全体的充足的有用の見地から、充分な権利をもって無化されるべき無用とは、通常はその獲得のために余儀なく追い込まれもする完璧な戦略の、端

的な裏返しでもあると知るべきだ。無能や怠惰が完璧な戦略の獲得を妨害しあるいは結果の欠落を肯定しようとも、犬を無化する戦略の性質は変わらない。世界がびつしりと何層にも有用の連関と戦力で埋め尽くされている。

その時人は真つ白になるだろう。企図された完璧な戦略をもって通常の已む無き欠損を含めて有用の充足的連関のすべてが肯定的同意的に満たされ、欠損を欠損として肯定しそして有用のサイクルを企図と戦略において当り前にすべてを果せば、そのことが可能的なことであれ、残るのは完璧な無為であるほかになく、追われながらも全力で企図した暁に？人はいわば疲労なき疲労に身を任す、あるいは満足なき満足に身を焦がす。その時犬は逆に戦略も労働も無化し無為の窓辺でおのれ自身の抵抗の息に囲まれるばかりだ。この可能的な極限、不可視の真空のゼロ地点が「辺獄の宿」か。獄からあるいは獄へ、逃げるためかどうか、全力で走りぬいた人の背後と前方に等身大の真空の空洞が必然的に生じているかのようなのだ。真空の空洞に漂う水没者のような真に寄る辺なき存在、捉えどころのない空虚な犬が透明な気体のように親しげに纏わり蹲る。遠い空虚に等しい無用の犬はつねに親しく近い。そのために頑固に等身大の犬はたんに犬であり続ける。それだけのことだ。受動の浮の義務を完遂する健気で高貴な犬が、戦略の桶の裏に凜然と潜む。透明で見えない。とはいえやはり犬だ。何者か。

空虚で無用である犬の頭蓋に、ある種の懷疑と憎悪に似た透明な氷温の感情が漂う。虚無の犬としてミイラのように凝固した「死んで生きる」犬であることの別の相が浮かび上がる。有用的連関からの追放と離脱に対する大らしい虚無的反発、懷疑は無間地獄そのものに似ていようと、犬は犬である、最後に残された可能的な在り方、このトートロジーへのそれしかない自家撞着と空間との絶対的不和、目標のない氷結する否定の激情・憎悪に悶える存在、ついには消尽と不在の必然を受け入れる冷たいミイラ。ガラスの犬はコルプスのないミイラだ。

さまざまな現象の交叉するなかで凝固したミイラ、おのれの空虚の境を全く知らず、おのれの死の鼓動に肝をつぶす、無知なこの生きたミイラに、あなたは出会ったことがあるか。

おのれの意志でミイラは立ち上がる、その周りで現実はみな動く。そして意識は、不和の火の粉をまくように、強いられたおのれの潜在性の場をくまなく駆けめぐる。

このミイラのなかには肉体の破壊が存在し、この知性の肉体の陰気な語り口の内には、この肉体

を祓うことの完全な能力が存在している。この不可思議な生身の静脈を走り、その痙攣のひとつひとつが世界のあり方であり、別種類の創造でもあるようなこの感覚は、誤った虚無の火傷のなかで道に迷っておのれを食い荒らすのだ。

ああ！　このような懐疑を養う父親となり、その気晴らしと花をひらく結着のなかで、誕生と世界を増やす者となることだ。とはいえこの肉体も要は端緒にすぎず、不在（アブセンス）、不在、不在……不在にすぎない。

アントナン・アルトー『ミイラ書簡』小浜俊郎訳

ミイラが起きて語るのは世界こそが文明信仰の狂気に落ちて阿呆然と眠っているからだ。文明の中で麻痺した愚鈍な狂酔者には感知されない「誤った虚無の火傷」が覚めたミイラの肌を痛々しく破る。破壊された肉体に残る「生身の静脈」。それはミイラをミイラと名づける執拗な文明のア・プリオリな母国語的血流、当り前に四圍の現実視線が放つ習慣の影か。痙攣の火種はこれだ。通常言語とまなざしによる安易な他者呼びわりは呼び寄せた低俗な自己保存に等しいゆえに、敏感な感性はおのれの血を抜くように不在を貫く。不在の露呈とともに空間と実体の有目的連関との直接的な離接（痙攣）が亢進する。ゼロと1の振動。同一と非同同一の往還振動。アルトーは「その痙攣のひとつひとつが世界のあり方であり、別種類の創造でもある」と痛々しくいう。アルトーの正気の創造と感覚は、痙攣の影が浮き彫りにする世界のあらゆる形や光景を、痙攣のひとつひとつにおいてショート発火するア・プリオリな現実との切断・短絡、すなわち安住を欠いた狂気の必然の火花の中で捉える。その際、同一と非同同一を繋ぐ一つの形式が言語による「のよう・」であり、このメタファーと類推の枝に幾何学的文明の森が覆い茂るのだが、心音にも巢食う「のよう・」の繁殖のリズムが通俗の耳に心地よい変身・擬態の娯楽にも聞こえるところにこそ道化師の悲劇が露呈しているというべきだ。文明の無頓着なア・プリオリな病と暴力を除去した無垢明晰な意識、ゼロと1、真正正銘の裸形正気の意識が狂おしく発火するゆえんである。

殷々としてもアルトーの語り口は覚醒した全くの正気だ。肉体の空虚を抱え陰気な語り口を余儀なくされ、アルトーは「私は夢のなかで覚めて語っているかのように」などと言っているようにも聞こえる。夢の中でもはや誰のものでもない空虚の口が吐いた気体や影を追って語っているようだ。夢なのに覚めた意識の中で声は二重になる。混濁した夢のあの犬声が蘇る。痙攣が襲う。

一歩ごとに(有用言語との必然の摩擦で)火傷が夢の肌を焦がす。必然のミイラが立ち上がり痙攣し懷疑と透明憎悪からの蒸留、虚無を純粹発酵する創造が始まる。ミイラさながらに青白い息を吐く詩のテキスト世界の創造。創造の中で覚醒者はたんに地を這う色のない蛇、抜け殻、不在の肉体(私)に出会うのみだ。というより有用の顔を失った月面におのれの透明存在を知り肝を潰す。執着も起源ノスタルジーも振り捨てたかのように、あらゆる有用的存在者が消えている。消えたのは、あるいは、あの奇怪な夢の中の叫び声が暗示したのだとして、消尽の官能の果てに肉体を持つ相手を殺した結果なのか。殺されたのは自分の方でもある。演者と観者を襲う収拾不能の苛立たしい夢の気体が口を塞ぎ呻き声を出す奇怪な創造。これが犬語なのかどうか知らない。

人は無用を託つ犬、見えもしない「誤った虚無の火傷の犠牲」なんかに当り前に頓着しない。反対に人は有用であれば糞でも平気で食らう。犬であるとは、人の口臭が染みた道徳や歴史に穢されない清浄と高貴、有用を完遂しそれゆえの畏るべき獯猛な破壊と完全戦略、ミイラでありながら冷酷無比な生命貫徹力を持つ不滅の存在の存在証を示すことだ。この存在証はもはや還元不能な憎悪の地底岩盤を持つ。そこにおいてミイラ犬の形象はさらに明瞭におのれの敵を見出すことになるだろう。濫澤龍彦は、人類の俗流エリート・俗物魚類学者に飼われかつ彼らに煮て食われる貴族犬種・狼犬フアキイルを、(その種を未成の存在である処女・麗子に宿すべく)幻想の誕生を欲望する、フアキイル欠乏の穢れない形象として描く。敵人類の内包的存在であり絶対の欠乏・欲望と憎悪の犬が内なる地底で吠える。完璧な戦略を背景に、増殖の欲望と生成を担いかつ孤高の虚無を完成するエネルギーの不毀高潔な吠え声だ。犬があくまでもたんに犬であり続ける理由がここにある。

譲れない憎悪。いうまでもなくそれは実際の心情とは無縁だ。感情ですらない。空間そのものが痙攣する憎悪を引き起こす金属的な獯猛さに満ちている。浮として余儀なくされる完璧な戦略の重圧とゼロ。清浄の不眠と白日の夜、蛇が這う盲目と死の空のもとの狂い笑い。「一昨日はまだ来ない」と時間を失った死者のように宣言する。空間の繫留を失った不眠の頭から千頭の犬どもが未曾有のやましさで脱走する。明るさの中の抜け殻どもの哄笑はやまない。w a w a w a w a . . . 。叫ぶ風の笛が夢の川岸と喉を吹きぬける。

奇妙なことに、かく言う、変なやつがまだいる。ナイフのまなざしを持った観客然とした蜘蛛の目は破壊あたわさる一者だからだ。こいつが、机の上に開かれた書物の蒼白さ詩の言葉で、影は影、

ガラスは見えない、と平然と言う。トートロジーのナイフは演者のおのれには達しないとでもいうように。「もうひとつの生」、「真夜の純粹な夢」の舞台が愈々輝く。

これが己れの裡に消え失せた、真夜の純粹な夢である、そして影のなかに姿をかくした真夜の成就の胸に抱かれて唯孤り棲んでいる、まごうかたないその明るさは、机の上に開かれた書物の蒼白さにおのが不毛を要約している、その本に、再びやってきた真夜によって語られた太古の言葉の沈黙が依然として生きつづけていることを別にしては、夜の、常のごとき頁と装飾、この真夜は次の数語によって終りをつげた無価値なおのが影を喚びます。我れは純粹に帰すべき時であった。

ステファヌ・マラルメ『イジチュールまたはエルベノンの狂気』 秋山澄夫訳

\*

夢で見た川岸の澄んだ白夜のことを想った。顔のない月と這う蛇。白夜。狂気。同形の犬。「私」でも「あなた」でもない意味ありげな連鎖転換人称。友愛と交互殺害。昏睡と官能死のイメージ。生きたミイラ。夢の中で奇声を発した犬の喉笛。たまねぎの頭蓋は犬の頭蓋か。犬語という不可解。「犬語の研究」なるテクストを書くこうと思った。  
すべてを宙吊りにしてやる。それは詩の光栄ある使命だと思う。

夏、毎晩の徹夜仕事でちよっと胸が苦しくなると、椅子から立ち上りガラスドアの外を見ると、夜更けの雨で濡れた舗道が白く光っている。

寝静まる暮らしのことに思いをはせる。「できればそうはしたくない」といつて牢獄で溶けてしまったあのバートルビー風のセリフがよぎる。いやちがう、ここが湿った牢獄の壁なんかではなく、上空の稲妻より遥かに高い成層圏に繋がる白い光の装いに包まれた空気の一部だとしたら、残されているのは成層圏の気持ちよさに通じる乾いた火花だ。むしろここで熱帯植物のように繁茂しろ、寝静まる

暮らしをこそ完成させてみる、という戦略的セリフの火花をおれは欲する。牢獄の中でのバトルルビのセリフも火花を放ち、ナイフのひらめきのように乾いた上空に突き刺さるだろう。火花は地上を離れ上昇やまない。それは一種の憎悪の力のせいだとも思える。

夜がガラスの向こうで白い光の装いに包まれている。ガラス越しに幻視した白夜の火花が真っ白に顔を照らす。顔。「あなた」。誰か。

私はあなたは私はあなたは私はあなたはあなたはあなたはあなたはあなたはあなたはあなたはあなたはあなた。ガラス越しに聞こえるかのような夢の叫びはそのままに。

堀田展造

・ 着想と引用の典拠

渋谷龍彦『犬狼都市』『猿園』 サミュエル・ベケット『モロイ』 ロートレアモン『マルドロールの歌』 アントナン・アルトー『ミイラへの祈願』 ステファヌ・マラルメ『イジチュール』 モーリス・ブランショ『白日の狂気』『至高者』『明かしえぬ共同体』『ロートレアモンとサド』『最後の人』『謎の男トマ』 エマニエル・レヴィナス『白日の狂気』についての試論』 ジョルジュ・バタイユ『宗教の理論』『内的体験』『マダム・エドワルド』『眼球譚』 ジル・ドウルーズ『狂人の二つの体制』『批評と臨床』 ミシェル・レリス『オランピアの類のリボン』『闘牛鑑』 B・M・シオラン『時間への失墜』 ジェラールドネルヴァル『オーレリア 夢と生』

トリストラン・ツアラ『アンチピリン氏 はじめて天空冒険』『種子と表皮』 ジャン＝フランソワ・リオタール『聞こえない部屋』 マルセル・デュシャン『全著作』『遺作』 ジャン＝ミッシェル・モルボワ『夢見る詩人としてのひらのなかで』『青の物語』 ゲルハルト・リヒター『エマ(階段の上の裸体)』 他

和田康『歴史と瞬間』 北山研二『ノートのマルセル・デュシャン、蝶番の思索者』 近藤耕人『サミュエル・ベケットのヴィジョンと運動』『写真との対話』

ガラスの犬【犬語の研究】

発行日 二〇〇九年七月一日

著者 堀田展造

発行者 知念明子

発行所 七月堂

東京都世田谷区松原二一六―六一〇三  
電話〇三(三三三五)五七一七

印刷・製本 トーヨー社

©Nobuzo Hota 2009 Printed in Japan  
ISBN978-4-87944-146-1 C0092

落丁・乱丁本はお取り替えいたしません。